

## 「特攻攻撃」と日本海軍につき思ふ（上）

加藤 淳平

八月なれば、月並みのことなるも、先の戦争における特攻作戦、及び日本海軍の冒したる失策、延いては日本軍が問題につき一言せん。

八月八日の讀賣新聞に、或る女性児童文學者の、生まるる前に、特攻攻撃に死したる伯父を、偲ぶ記事あり。今は明らかにされる伯父の、最後の特攻攻撃の模様を記す。

児童文學者が伯父、海軍兵學校出身の、練達の航空士官なりき。指揮する特攻機隊、昭和二十年五月十四日早朝、各機五百キロの、爆弾を積みたる零戦にて、鹿兒島縣鹿屋基地より出撃す。敵空母エンタープライズに接近するも、「特攻機は次々と撃墜せられ、残存せるは、伯父の隊長機一機のみとなれり。伯父は敵の攻撃を掻いくぐりて、雲中に逃げ込み、機を窺ひたるも、やがて雲間より飛び出し、迎撃の隙を衝きて高度を下げ、目標より逸れんとする機體を反轉せしめ、背面飛行にて、軌道を替へ突つ込みて、爆發により、敵側乗組員十四名を戦死せしめたり」とぞ。

讀みて感あり。戦史に據らば、日本軍の特攻攻撃、昭和十九年十月、レイテ戦より開始せらる。當初は米軍に取り、豫想せざりし作戦なれば、相當の戦果を収む。されど日本軍の特攻攻撃續きて、損害少からざれば、米軍、如何に即應すべきかを、急ぎ研究し、對應策を講ぜり。さればレイテ戦より半年後の、五月の沖繩戦頃には、米軍が、日本の特攻攻撃への對應策、已に有效なるものとなるに非ずや。尠くとも、米軍側が戦闘記録に據りたると覺しき、上の記録を讀まば、然く考へざるを得ず。

米軍が對應策、戦史の記述に従はば、次の如し。電探による索敵技術の精度を高め、日本軍機接近せば、直ちに迎撃機を發進せしむ。日本軍機が主要目標、空母なれば、空母周

邊、廣き範圍に互り、

驅逐艦等の補助艦艇多數を配置す。一に對空砲火の彈幕を張りて、空母を護衛し、二に迅速なる操船行動により、日本軍機の動きを混亂せしめ、三に日本軍が特攻攻撃を向くる爲にして、現に戦史は、特攻機の命中により、沈没せる米艦、空母より驅逐艦の、遙かに多きを記録す。

祖國が爲に、己が生命を犠牲にせる特攻攻撃なれば、我が如き後世の無責任なる者、輕々に、批判的言辭を列ぬるを、遠慮すべきも、敢へて後世の者が特權により、不遜の言を弄せば、上の敵空母エンタープライズに對する特攻攻撃、些かの戦果を擧げたと雖も、戦

果の、我が軍が犠牲に、均衡せりとは思はれず。されば作戦、成功なりしと、斷じ得ざるに非ずや。

次々と、撃墜せられたる特攻機、何れも、操縦技術未熟なる少年航空兵の、操縦機と覺しきが、容易に、迎撃機が標的となりしは、「無駄死に」に外ならずと、言ふべきか。當時の日本には、操縦訓練が爲の練習機も、練習機の燃料も、更に訓練指導に當るべき教官も、已に拂底し、少年航空兵等の、操縦技術を向上せしむるは、至難のこととなり居れば、海軍指導部、未熟なる操縦技術の、少年航空兵等の操縦機なりと雖も、數機は、米軍機が迎撃を凌ぎて、目標に到達せむとの、推測の下に、出撃せしめたるか。されど斯かる推測、米軍側の、對特攻機即應態勢が厳しさを、正確に判斷し得ざりし責めを、免れ得ざらむ。また隊長機が操縦技倆を見るに、斯かる卓越せる操縦技倆を、備へたる操縦士、海軍全軍に、果して何人ありや。多數ありしとは思はれず。多年の訓練により、養成せる斯かる優秀なる操縦士を、

唯一度の特攻攻撃に、消耗せるは、人材の「無駄遣ひ」に非ざるや。貴重なる人材の、效率的活用は、特攻攻撃ならで、通常攻撃に反復出撃せしむるか、または教官として、少年飛行兵が訓練と養成に、従事せしむるかの、何れかならずや。

未熟なる技術の少年航空兵等を、「無駄死に」せしめたるは、大東亞戦争全體を通じ、緒戦を除きて、我が軍の常に冒したる誤りなり。情報の閑却、その結果としての、甘き情勢判断、敵方の力の過小評價と、我が方が力の過大評價、戦果の誇大視、人命輕視等、現在の日本の、大東亞戦争史に、反省を籠めて、反復記述せらるれば、改めて強調する必要無からむ。されど卓越せる技倆を、備へたる人材の「無駄遣ひ」は、指摘せらるること、稀なるに非ずや。

少年航空兵等を死なしむるならば、熟練の隊長も亦死すべしとの、今の日本とも共通する、觀念的「平等主義」の弊、ここに無きや。

特攻作戦は、それを推進せる大西瀧治郎海軍中將の言の如く、絶対非常時に限り、採るべき「外道の作戦」にして、軽々に用ふる可からざるは、大西等、當時の海軍指導部も、よく辨へたるところなりき。昭和十九年秋のレイテ作戦に、特攻攻撃敢行せるは、レイテこそ、日本軍が最後の決戦なれとの、判断ありし故なれば、理解し得ざるに非ず。されどレイテ作戦の、不首尾に終りたる後も、ずるずると、同じき作戦を繼續せるには、厳しく責めを、問ふべきに非ずや、との疑問あり。況んや米軍が、特攻攻撃への對應態勢、整ひたるを、知らざりしに非ざるに於てをや。

大東亞戦争中の海軍、特に聯合艦隊は、昭和十八年の、暗號解讀による山本五十六司令長

官戦死等、

数々の失態を冒せり。翌昭和十九年三月に、南洋群島、パラオにありし聯合艦隊司令部、米軍が攻撃意圖を誤認し、忽々のうちに、山本が後任の古賀峯一長官、福留繁參謀長、その他司令部參謀等ともに、打ち揃ひて、二機の水上艇にて、フィリピン・ミンダナオに避難せんとし、途中、フィリピンの島にて、事故に逢へり。

古賀長官、搭乗せる水上艇墜落して、殉職す。福留繁參謀長と參謀等、フィリピンのセブ島に不時著し、米軍士官指揮下の、フィリピン人ゲリラ軍が捕虜となりて、暗號表、その後の作戦計劃等の、機密書類を奪はれたるも、解放後、東京にて受けたる査問に、捕虜となりたる、機密書類を失ひたる等、全ての事實につき、或いは過少視し、或いは隱蔽・否認せしかば、暗號も、作戦計劃も變更せられず、日本軍は、當初計劃通りに、作戦を續行せり。

米軍、日本軍が機密書類を入手せるを、秘匿せんため、様々なる措置を取りつつ、以後の日本軍が行動計畫を、航空機及び海軍艦艇の、參加機數・艦數、兵員の人數より、指揮官の名まで、全てを知悉して、作戦を実施したれば、これ以後の、太平洋に於ける戦闘は、米軍不敗となれり。

福留の、東京にての査問を、切抜けたる後、海軍は一切を不問に附し、この人を、特攻攻撃の總指揮官に榮轉せしむ。特攻作戦開始以後、海軍が戦果報告の、誇大なるを疑ひたる大本營、海軍報告通りには、戦果を公表せざりしに、福留、海軍を代表して、大本營に嚴重抗議せり。そが爲に大本營、以後海軍が報告をその儘公表し、情勢判斷、及びその後の作戦を誤らしむ。

特に福留が司令官として、指揮せる昭和十九年十月の「臺灣沖航空戦」、實際には、米軍が損害、極めて輕微なりき。されど福留が戦果報告、誇大にして、大本營、それに基づき、米軍機動部隊に、壊滅的打撃を、與へたるが如き發表を行へり。米軍側、何故に日本軍が、斯くも誇大に、戦果を誤認せるやを、訝りつつも、恰好の冗談の種とす。海軍幹部は、實情を知らざるにあらざりしかども、海軍の面子あれば、それを陸軍に知らしめず。

これにより陸軍は、米軍主力が戦力、大幅に低下せりとの、誤れる前提の下に、ルソン決戦の計劃を、レイテに於ける決戦に變更し、レイテ、ルソンともに、大敗を喫す。敗戦後の米軍が記録に據らば、日本軍が當初計劃に従ひ、ルソンに戦力を集中して戦ひたりとせば、米軍が侵攻を、少くとも數箇月は、遅延せしめ得たること、明らかとなれり。大東亞戦が歸趨、福留が誇大報告、及び海軍報告を尊重せよとの、申入れにより、斯く誤らしめられたり。

福留、海軍大學首席卒業の秀才なりき。學業優秀者の、時に實戦の愚將なる例あれど、そ

が好例ならずや。學校にて學びたる通りの「大艦巨砲主義」と「艦隊決戦」に固執し、大東亞戰が終末近くまで、航空戰が重要性を、理解し得ざりき。斯かる愚將の、海軍が要職を占めたる、豈日本が不幸の一つなりしと、言はざるべけんや。されどこの人、自らが責任を逃れんとするに、執念深く、フィリピンにて捕虜となりしにより、日本の軍事機密を、米軍が入手せる事實の、廣く知られたる敗戦後も、尚自ら著したる著書等により、自分の責任を、否認せんと努めたり。

福留、大西瀧治郎とともに、特攻作戰實施の、最高責任者なれど、若き特攻隊員に、同情の言葉を發したる記録無し。大西瀧治郎、及びその他の海軍幹部に、敗戦後自死せる者多し。自死までに至らずとも、多くは責任を感じ、或いは沈黙を守り、或いは行動を慎みたり。されど福留は然らず。東京に於ける査問直後の一夜、海軍幹部等、福留を海軍省の一室に放置し、密かに自死を期待せるも、福留に自死の氣配無かりしとぞ。戦後はしゃあしやあと、自分が海軍の代表なるが如く振舞ひ、舊海軍軍人が親睦會、水交社の代表等を勤む。

この人、生來感受性鈍き人にして、物事を眞剣に突き詰むることなく、何事にも、無頓著なりしに非ずや。職務上は、大西瀧治郎が上官として、特攻作戰實施の最高責任者なりしも、特攻作戰にも、日本の敗戦にも、さして悩みたる形跡無し。現役軍人の頃より、肥滿體にて、捕虜となりて後、解放せられたる時も、ゲリラ側は、負傷したる肥滿體の福留が、擔架を擔がしむる爲、屈強なる男數人を要せりと傳ふ。

海軍部内の附合ひには、長けたる人にて、敵の捕虜となり、重要書類を失ひたる責任、最終的には問はれで、却りて要職に昇進せるも、平素の、部内の附合ひの、好かりしお蔭ならずや。

(令和二年八月二十五日受附)